

## 「種」と「類」の語源的意味について

山崎 清巳\*

## On the Etymological Meaning of "Species" and "Genus"

Kiyomi YAMASAKI

## Abstract

This paper will investigate whether or not the important English terminologies of "species" and "genus" are translated correctly into Japanese. If we don't possess proper Japanese words for these terminologies, then our Japanese-language contributions to related fields will remain severely limited.

"Species" and "genus" are very important terminologies in the fields of philosophy and logic. "Species" is included within "genus" according to Aristotelian logic. "Species" comes from "eidos" and "genus" from "genos" of ancient Greek. "Eidos" has "to see" and "genos" has "born and to produce" as etymological meanings.

"Eidos" is fitted to "SHU (種)" and "genos" to "RUI (類)" in Japanese. But "SHU" means "seed"; "RUI" means "similar and hard to distinguish between". Therefore, "genos" should be fitted to "ZOKU (属)" in Japanese, because "ZOKU" means "born and blood relation". If we refit "eidos" to "RUI" and "genos" to "ZOKU", then many problems are overcome. For example, "RUI" and "ZOKU" become the verbs "RUIsuru" and "ZOKUsuru", respectively, while "the human species" closely corresponds to "JIN-RUI" etc. And we can find many cases in which "eidos" better corresponds with "RUI" and "genos" with "ZOKU".

If we refit "SHU" to "RUI" and "RUI" to "ZOKU", then we can more easily understand "Categories" and "Metaphysics" by Aristotle, or Japanese books such as "ZO WA HANA GA NAGAI" by Mikami, A.

## 哲学・論理学用語としての「種」と「類」

哲学・論理学用語辞典(1985 三一書房)は、「類【genus】アリストテレス(古典的)論理学の用語。種【species】に対する。〈同じ共通の性質をもっているモノ二つ以上のアツマリ(集合)を類といい、その〈類を形づくる一つ一つのもの(メンバー)〉を種という」、また固定した動植物分類学上の「種」「類」と、相対的な論理学用語としての「種」「類」を記載している。

"species"と"genus"という英語はラテン語を経由している。アリストテレスの用いた「エイドス」が"species"と、「ゲノス」が"genus"と訳されたのである。「生まれる、生産する」を意味する印欧語根\*ge-から派生した「ゲノス」は、generation, generator, genius, genetic, genderなどと共通の語であり、ジャンル(genre)はフランス語を経由した「ゲノス」である。

「エイドス」という語はなじみが薄い。しかし、「エイドス」から派生し、「…のような(物)、…状の(物)、…

質の(物)、…類似の(物)」などの意の形容詞・名詞を造る接尾辞"-oid"の付く語は少なくない。たとえば、「anthropos(人)」に"-oeidos(種類, 形)"が付加されて"anthropoid(人のような, 類人猿)"となる。

接尾辞"-oid"の付く語には、古典的に使用されてきた語(anthropoid, geoid, rhomboid, trapezoidなど)と、新しい発見・発明に伴って新造された語(alkaloid, celluloid, Mongoloidなど)がある。前者はユークリッド、ストラボン、アリストテレスなどに使用例があり、後者のセルロイドはアメリカの発明家ハイアト(1837-1900)の造語であり、アルカロイド、モンゴロイドなどもよく目にする語である。古典的に使用されてきた接尾辞"-oid"が、新しく造語する際に利用されたものと思われる。ただし、geoidには、アリストテレスの「大地の、大地のような」という古典的な意と、「表面を全部平均海面と見なした地球の形」という新しい地球物理学の意がある。相対的な論理学用語としての「種」「類」などは、アリス

\*教養部

平成9年9月30日受理

トテレスの著書を検討する必要がある。

「カテゴリー論」の第5章には、「例えば或る特定の人間は種としての人間のうちに属し、そして動物がその種の類である」という例文がある。すなわち「人間」というのは「種(エイダス)」であり、「動物」というのは「類(ゲノス)」であり、種は類に含まれることが述べられている。

これら「種」と「類」という概念が導入されたわが国における使用例を見よう。三上章は「テニヲハ」, 中でも「ハ」研究に一生を捧げた日本文法の研究者である。その主著「象は鼻が長い」第1章第3節には、種概念と類概念に関する興味深い表現がある。

「包摂判断を表わす文, すなわち種概念を類概念へ解消するもの,

鯨ハ, ケモノダ]

種概念を類概念へ解消するとは、鯨という種はケモノという類に包摂または包含されるということを示し、三上流に言い表わしたものである。

これら「種」と「類」という日本語は「エイダス」と「ゲノス」の訳語として適切であるか否かを検討し、適切でなければ、適切な日本語を示すというのが本論文の目的である。

#### 古代ギリシャ語からラテン語、フランス語、英語、ドイツ語への訳について

「カテゴリー論」の第5章で引用した部分の「エイダス」と「ゲノス」に相当する個所を、ラテン語(Pacius), フランス語(Tricot), 英語(Ackrill), ドイツ語(Gohlke, Oehler)の訳で確かめると、エイダスに相当する語は、ラテン語species, フランス語espece, 英語species, ドイツ語Art, ゲノスは、ラテン語genus, フランス語genre, 英語genus, ドイツ語Gattungとなっている。

ゲノスについては、すべてが印欧語根\*ge-に由来する語であり問題はない。しかし、エイダスについて、ラテン語、フランス語、英語ではエイダスと同じ「見る」という意のラテン語specereに由来する語であるが、ドイツ語のArtは印欧語根\*ar- (英to join)に由来するラテン語ars(英skill)から派生する語で、ギリシャ語のエイダス「見る」という意は含まれない。強いて言えば、技術(skill)の結果としての形ということになる。ギリシャ語からラテン語へ訳は適切である。そのラテン語訳を忠実に守っているフランス語、英語には哲学・論理学用

語として問題がないと思われる。ドイツ語訳に関する問題点を挙げよう。「カテゴリー論」の第3章の中ほど「異なる類」という個所を、GohlkeはArtverschiedenesとArtを使い、OehlerはDie Differenzen von GattungenとGattungを使って訳している。またドイツ語・古代ギリシャ語辞典には、Art(種)に対しても、Gattung(類)に対しても、ギリシャ語としてゲノスが重複して記載されている。Artはラテン語系、Gattungはゲルマン語系であることなどを合わせて考えると、この食い違いの問題は小さくない。

これは学術用語でも自国語へ翻訳し直すドイツ語と、学術用語はラテン語のまま使用するフランス語、英語との差でもある。学術用語でも肌で感ずべきだとすればドイツ語の方が好ましく、用語の意味の不変を重視すればフランス語、英語の方が勝っている。

また、固定した動植物分類学上の「種」「類」としては、研究社「新英和大辞典」classificationの項に、《生物》分類: phylum(門), class(綱), order(目), family(科), genus(属), species(種), variety(変種)があり、speciesの項の“the human species”には「人類」という訳がある。

#### エイダスに「種」、ゲノスに「類」という訳語を当てるのは適切であるか否か

三上章の「鯨ハ, ケモノダ」という例文に戻る。この文は「鯨ハ, ケモノニ含マレル」と書き換えても意味は変わらない。しかし、これには「種」とか「類」とかいう用語が使われていない。「鯨ハ, ケモノニ含マレル」と同じ意味にはならないが、「類」を動詞にして「類ス」として書き換えると、「鯨ハ, ケモノニ類ス」となる。「鯨ハ, ケモノニ含マレル」と同じ意味の文にするには、「類ス」を「属ス」にして、「鯨ハ, ケモノニ属ス」と書き換えなければならない。

「鯨ハ, ケモノダ」を意味が変わらないように書き換えるには、「鯨ハ, ケモノニ類ス」にするか、「鯨ハ, ケモノニ属ス」にするかという問題を42名の学生に出題した。その結果、「鯨ハ, ケモノニ属ス」33名、「鯨ハ, ケモノニ類ス」9名となった。

種概念と類概念から、「種」と「類」、さらに「鯨ハ, ケモノダ」の書き換えに用いた「属」について、その字源・語源を加藤常賢著「角川字源辞典」によって調べる。ただし、「米頁\*1」字は常用漢字ではないので、「漢字の起原」による。

\* 1：頁が部首、米が音を表わす字、JIS 第2水準にないのでこのように表記した。

## 種

字形：穀禾（こくか）の意味を表わす「禾」と、音を表わす「重（ちょう）」とからなる形声字。

字音：ショウ。「重（ちょう）」がこの音を表わす。「重」の音の表わす意味は、「遅（ち）」（おくれる意）である。「チ」の音が「チョウ」「ショウ」に変わった。

字義：遅れて熟する穀禾。穀物の晩生。「わせ」の反対である。「たね」「たねまき」「種類」の意に使うのは借用で、この意味の本字は実は「禾童\*2（ちょう）」である。しかし経書の中で、この「種」「禾童」の二字は、すでに混用されている。

\* 2：禾が部首、童が音を表わす字、JIS 第2水準にないのでこのように表記した。

## 類

字形：意味を表わす「犬」と音を表わす「米頁（らい）」とからなる形声字。

字音：ルキ。「米頁（らい）」がこの音を表わす。「米頁」の音の表わす意味は、「狸」（たぬきの意）である。

字義：狸に似た髦（たれがみ）の獣の名。

類似という意味に使うのは借用であり、その意味の本字は「米頁」（見分けのつかない意）である。

## 米頁

字形：説文を始め、多くの学者は会意によって説いているが、朱駿声が「按ずるに、この字は頁（けつ）に従ひ米（まい）の声なり（通訓定声）」と言うのが正しく、形声字と見るべきである。

字音：ライである。「米」がこの音を表わす。この音の表わす意味は「迷（めい）」の場合と同じく「昧（まい）」である。「頁」は頭の意である。したがってこの字は説文が言う「暁（あきら）かにし難し」とか、「相似て分別し難し」の意ではなく、「頑迷」と熟字する「迷」の本字である。「頑迷」は「頑米頁」と書くべきである。愚鈍な頭の意であるから、「物事の区別の解からない（昧）頭」の意である。「米（まい）の声」と「ライ」とは、いにしえは同部の音であるから通用したのである。

字義：「区別がはっきりしない」意から、この字を「類似（るいじ）」の意として使われた。後にはこの意味にはもっぱら「類」字が使われた。

## 属

字形：「尾（び）」の字で、尻（しり）に毛のある形を表わし、女陰の意である。この女陰の意味を表わす「尾

と、音を表わす「蜀」とからなる形声字。

字音：ショク。「蜀（しょく）」がこの音を表わす。「蜀」の表わす意味は、「続（しょく）」（つづく意）である。

字義：女陰から続いて生まれる意。血のつながり。家族の「族」の本字である。それから単に「つながる」「付属」などの意となった。酒などを「つぐ」「さす」意に用いるのは借用で、その意味の本字は「注」である。

「種」は「タネ」、「類」は「似ている、見分けがつかないこと」、「属」は「生まれる、血のつながり」を意味している。また、「類」を「タグイ」と訓ずるときの、「タグイ」は【偶ひ・類ひ・比ひ】《似つかわしいもの、あるいは同質のものが二つそろっている意。類義語ツレはつながって一線にある意。ナラビは、異質のものが凸凹なくそろう意》と岩波古語辞典に掲載されている。「類」を「タグイ」と訓ずるのは、間違っていないことが分かる。

以上より、「見る」という意のある「エイドス」には「類」、「生まれる、生産する」という意のある「ゲノス」には「属」を当てて訳すのが適切だといえる。

## 「種」「類」を「類」「属」に入れ換えて読み直す

「種」と訳されていた「エイドス」に「類」を、「類」と訳されていた「ゲノス」に「属」を当てて意味の整合性を検討しよう。

三上章著「象は鼻が長い」の「包摂判断を表わす文、すなわち種概念を類概念へ解消するもの、鯨ハ、ケモノダ」において「種」を「類」に、「類」を「属」に入れ換えると類概念を属概念に解消するとなり、「類」が「属」に属することが前面に出てきて意味が明確になる。

「属ス」を選んだ学生の挙げた理由に、「ケモノニ類スでは、ケモノの類でケモノではないかもしれない」「鯨は魚ではないから」などがあつた。表現は幼稚であるが、確かに「類」という用語の本質をとらえている。「類ス」は、同じ物であるか否かは確かではないが、似ているという判断である。「鯨」は、魚であるか否かは確かではないが、水棲であり姿を見れば、「魚」に似ているというのが「類ス」である。そのことは「鯨」という漢字の部首が「魚」であることを見ても明らかである。ドイツ語でも鯨を Walfisch といい、後ろに Fisch（魚）がついている。

「カテゴリー論」の第5章「例えば或る特定の人間は種としての人間のうちに属し、そして動物がその種の類である」において種を類、類を属に入れ換えると、「例えば或る特定の人間は類としての人間のうちに属し、そして

動物がその類の属である」となり、後者の方が意味がすっきりするように思われる。

また「形而上学」第5巻第2章は、ゲノスの項であり、「ゲノス〔種族、類〕と言われるのは、……中略……かれらの出生の由来する第一の父祖が、前者のはヘレンであり後者のはイオンであるからである。この場合、この種族の名は、ことにかれらを生み出した者……場合によっては母系によって名づけられることもある、たとえば『ピルラの後裔』と名づけられるがごとく。以下略(ただし〔 〕は訳者の訳文中の訳注)」とあり、訳者出陣は「ゲノス」の訳として「類」だけでは不十分と判断し、「ゲノス〔種族、類〕」のように種族(属)を付け加えている。さらに訳注1で「ゲノスは、ゲネシスやゲネスタイなどと同様に『生殖』『生成』を意味する語根“gen-”から出た語で、ラテン語の相応語“genus, generatio, gnascor”もこれと同様である。この語が、『生まれ』(たとえばアテネの生まれ、イオンの子孫、部族、種族)の意から、論理学で言う『種』(エイドス:ラテン語 species)に対する『類』(ゲノス:ラテン語 genus)の意に拡張された。ドイツ語の“Gattung”も同様」と述べている。「生殖」「生成」を意味する「属」と「ゲノス」が対応し、「エイドス」を「類」に、「ゲノス」を「属」に訳していれば、「ゲノス〔種族、類〕」という訳注は必要ではなく、父祖の系統を「種」、母系を「属」とすると意味はもっと明確になる。

ギリシャ語語源辞典に、ゲノスの派生語にゲニケーという語が記載されている。これはドイツ語の Genitiv(属格)という意味である。属格とは、ドイツ語、ラテン語などで「何々ノ」と訳されることの多い格である。三上章は「象は鼻が長い」第1章第8節で所有の「ノ」と表現している。また所有の「ノ」すなわち属格の「ノ」を説明した後に、「最高類概念」という用語を使っている。「ヤハリ良イ手段ヲ選ブ koto

手段ハ、ヤハリ良イ( )ヲ選バナケレバナラス。

ナルベク新シイ辞書ヲ買ウ koto

辞書ハ、ナルベク新シイ( )ヲ買イタマエ。

先日買ツタオ酒ガマガダ残ッテイル koto

オ酒ハ、先日買ツタ( )ガマガダ少シ残ッテオリマス。

空所には同じ名詞のほかに『品』や『モノ』や『ノ』を入れることができます。ゼロを入れると——つまり入れ忘れると、短絡が起こります。準体詞『ノ』は「いわば最高類概念です」とある。

またアリストテレスの「形而上学」第8巻第6章「感

覚的のにせよ思维的のにせよ、およそなんらの質料をも有しないものども〔最高の類概念〕(ただし〔 〕は訳者の訳文中の訳注)」の「最高の類概念」も合わせて考察しよう。

アリストテレスがここで言っている「質料をも有しないものども」こそ、日本語の準体詞「ノ」ではなかろうか。「行くのはやめた」「行くのは誰だ」において、前者の「ノ」は「コト」であり、後者の「ノ」は「人、モノ」である。日本語の準体詞「ノ」は、「モノ」にも「コト」にも何にでもなれるのである。名詞と動詞の橋渡しをしているのである。準体詞「ノ」を挟んで「モノ」と「コト」が変わるとも言える。同じ形の「ノ」が名詞について、その名詞に続くものを後ろに接続させるのが、属格の「ノ」である。属格とは続かせる格なのである。最高属概念とは何でも「含む」すなわち「属させる(モ)ノ」と言い表わすことができる。だから、類概念ではなく、属(統)概念なのである。

#### 結論、「種」「類」は「類」「属」と訳し直すべきである

1) 「類ス」という動詞と「属ス」という動詞は対になる。2) 「類」の字源は「見分けがつかない、似ている」、古代ギリシャ語のエイドスは「見る、似ている」に由来し、両者に「見る、似ている」という意味がある。3) 「属」の字源は「生まれる、血のつながり」、ゲノスには「生まれる、続き柄」という意味がある。4) アリストテレスの「カテゴリー論」「形而上学」でエイドスを「類」、ゲノスを「属」と訳すと意味が分かりやすくなる。5) 「象は鼻が長い(三上章著)」の種概念・類概念は類概念・属概念と訳したほうがいい。6) ゲノスの派生語ゲニケーは属格と訳す。7) 動植物分類学上で“genus”は「属」となっている。8) the human speciesの訳は人類である。以上のことは、「類」が視覚によって物を指定する基準であること、「属」が血のつながりにより物・事の関係を定義する基準であることを物語っている。

また「形而上学」の第1巻第6章の訳注4には「プラトンの『アイデア』または『エイドス』も、またアリストテレスが本書(形而上学)で主題とする『実体ウーシア』または『本質ト・ティ・エーン・エイナイ』も、あるいは『形相』『エイドス』も、結局このソクラテスの対話問答に由来する」とあり、訳注5には、「プラトン学徒では、この『アイデア』は『エイドス』とほぼ同義に用いられた。アリストテレスがこの意味を転じて事物に内在す

る『本質』の意に用いた場合の『エイダス』は、慣例によって『形相』と訳した」とある。プラトンの「イデア」すなわち分類した物の本質、理想的なその形から、アリストテレスの「形相」へと移るのである。漢語の「類」はエイダスより弱いかもしれない。二つの物の間で見分けがつかないなら、その二つは同じものであると、判断する操作を分類という。それと異なり、「属」は、あらゆる物の間の続き柄を調べる操作である。まず男女の結合を「属」といい、そこから続いて出てくる物の続き柄、物と物との続き柄、物と事との続き柄、事と事との続き柄、最高の属概念としての準体詞「ノ」はあらゆる物と事を一身に引き受ける。このことはスペシャルとジェネラルを考える場合も同様である。ラテン語の *specere* (見る) という動詞は、エイダスのラテン語訳 *species*、英語 *special* などの元にある。スペシャルとは「目立つ」のである。「エイダス」は、目立つ個所を目印に違いを認め、分類する操作なのである。*genus* に由来し、続き柄を問題とする英語ジェネラルは、何でもかでも、次から次へと続けて一般化するのである。

以上のことから、眼前にあるものを認識することにおいて、「エイダス」は、「ゲノス」に比べてはるかに重要な用語であることが分かる。そして「エイダス」は「類」と訳さないと、類似・類比・類推などの用語との共通部分が明確にならず、考えが進まないのである。考えを進めるということを語源にそって考えると、かむが・へ【検へ・勘へ・考へ】〔下二〕《古くはカムカへ。カは、アリカ・スミカのカ。所・点の意。ムカへは両者を向き合わせる意。二つの物事をつき合わせて、その合否を調べ、ただす意》だからである。それは漢字の「比」二人の人が並んでいる象形字と似ているし、アナロジーの訳「類推、類比」にある「類」は、「イデア」「エイダス」「形相」の意味での「類」であり、「ゲノス」の訳語は「属」とすべきである。

ギリシャ語、フランス語、ドイツ語の表記について

ギリシャ語は原則としてカタカナで表記した。ただし、「形而上学」の訳注は訳者の表記にしたがいラテン文字で表記した。

フランス語のアクサンは省略、ドイツ語のウムラウトは ae, oe, ue, エスツェットは ss と表記した。

#### 参考文献

アシモフ, I. 1972 科学の語源250 共立出版

思想の科学研究会編 1985 哲学・論理用語辞典 三一書房

三上章 1960 象は鼻が長い くろしお出版

#### 翻訳書

Ackrill, J. L. 1963 *Aristotele's Categories and De Interpretatione*. Oxford: Clarendon Press.

Gohlke, P. 1972 *Aristoteles Kategorien u. Hermeneutik*. Ferdinand Schoeningh Paderborn.

Oehler, K. 1984 *Aristoteles Werke in deutscher Uebersetzung Kategorien*. Berlin: Akademie-Verlag.

Pacius, J. 1967 *Aristotelis Organum*. Frankfurt/Main: Minerva.

Tricot, J. 1989 *Aristote. L'organon: I. Categories; II, de l'Interpretation*. Paris: J. Vrin.

出隆 1959 形而上学 岩波書店

山本光雄 1971 カテゴリー論 アリストテレス全集 1 岩波書店

#### 辞書

Frisk, H. 1973 *Griechisches Etymologisches Woerterbuch*. Heidelberg: Carl Winter Universitaetsverlag.

Gemoll, W. 1954 *Griechisches-Deutsches Schul- und Handwoerterbuch*. Muenchen: G. Freitag Verlag.

Guethling, O. 1987 *Langenscheidts Taschenwoerterbuch der Deutschen und Altgriechischen Sprache*. Berlin: Langenscheidt.

Liddell, H. G. and Scott, R. 1968 *Greek-English Lexicon*. Oxford: Clarendon Press.

Menge, H. 1986 *Langenscheidts Taschenwoerterbuch der Griechischen und Deutschen Sprache*. Berlin: Langenscheidt.

Rost, V. C. F. 1993 *Passow Handwoerterbuch der Griechischen Sprache*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

大槻真一郎 1975 科学用語語源辞典 ギリシア語篇 同学社

大野晋編 1974 岩波古語辞典 岩波書店

加藤常賢 1970 角川字源辞典 角川書店

加藤常賢 1970 漢字の起源 角川書店

小稲義男編 1987 新英和大辞典 研究社

富山芳正編 1993 独和辞典 郁文堂

増田綱編 1988 新和英大辞典 研究社